

ひこ う え もん ばし かまあと
彦右工門橋窯跡 ~古代生産遺跡の発掘調査成果~

宮城県教育庁文化財課

1. 調査要項

所在地：大衡村大衡字萱刈場・字吹付
 駒場字彦右衛門橋
 調査原因：国道4号拡幅工事
 調査期間：2020年9月3日～12月25日
 対象面積：約1600m²
 調査面積：約1000m²(6区)
 調査主体：宮城県教育委員会
 調査協力：大衡村教育委員会
 調査担当：佐藤涉、伊東博昭、風間啓太

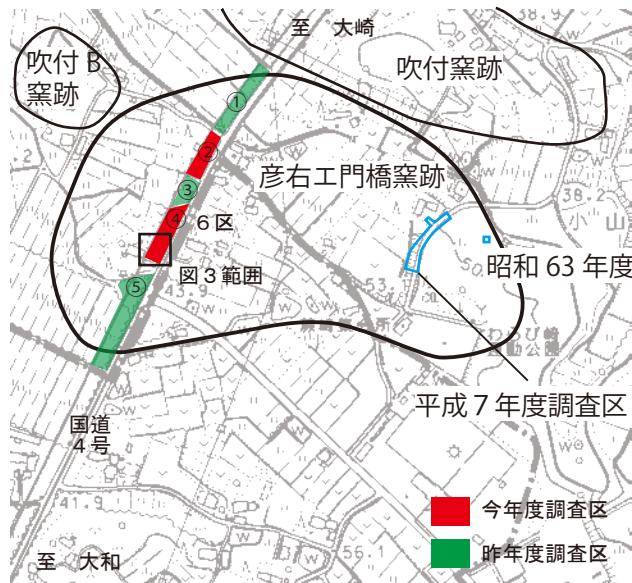


図1 彦右工門橋窯跡の立地と調査区

2. 彦右工門橋窯跡の立地と大衡窯跡群

彦右工門橋窯跡は大衡村駒場字彦右衛門橋・字吹付・字萱刈場ほかに所在する(図1)。大衡村の北側、大衡村役場から北に約3kmの大松沢丘陵西縁の緩斜面に立地するこの地域では、彦右工門橋窯跡のほかにも待井沢窯跡A・B地点、萱刈場窯跡A・B・C地点、吹付窯跡、吹付B窯跡、横前窯跡の9地点で古代の窯跡が複数みつかっており、それらは総じて大衡窯跡群と呼ばれている(図2)。窯跡の年代は8世紀中頃から9世紀後半で、須恵器を中心に生産している。

昨年度は、丘陵南緩斜面から沢にあたる部分(図1⑤)で土師器焼成遺構6基、鉄滓を廃棄した土坑2基、焼成遺構3基、整地層、古代の河川跡を調査した。窯本体はみつかっていないが、整地層や土師器焼成遺構を埋め戻した土から、窯跡に由来するとみられる瓦や大量の須恵器が出土している。瓦のなかには、名生館官衙遺跡やその附属寺院の伏見廃寺などでみつかっていた珠文縁素弁蓮華文軒丸瓦があり、本遺跡がその生産地であることが判明した。



図2 大衡窯跡群と調査地点

3. 発見した遺構と遺物

今年度の調査区（図1④）は、昨年度調査区の北側、南北を西から入る沢に挟まれた東から西に延びる丘陵西端の頂部にあたる。丘陵頂部平坦面で掘立柱建物跡1棟、竪穴建物跡8棟、土器焼成遺構11基、土坑などを調査した。遺物は、整理用コンテナで70箱ほどある。大半が土師器と須恵器で、わずかに瓦などが出土している。



図3 彦右工門橋窯跡平面図

豎穴建物跡

丘陵頂部平坦面に集中する。いずれも近接、あるいは重複した状態で検出されており、北西に向かってなだらかに低くなる調査区北側斜面には建物跡は分布しない。表1に示したように、建物跡は平面規模や付属施設の種類が多様で、ロクロピットや粘土塊など土器製作をうかがわせる遺構や状況を確認している。以下、各施設の特徴などを報告する。

カマド 建物ごとに異なるカマド構造が採用されており、多様性がみられる。

【位置】 SI23とSI29は東辺には付設されており、それぞれ、北東隅寄り、南東隅寄りにある。SI22では北辺中央にカマド1、北辺西寄りにカマド2、南辺南東付近にカマド3の計3基が付設され、カマド2・3は辺の隅に寄る傾向が認められた。

【構造】 調査したカマドは、燃焼部の付設位置と煙道の長短から3つに大別できる。

I類 燃焼部が建物壁の内側にあり、長煙道のもの。(SI22 カマド1、SI24)

SI24では袖は粘土で構築され、燃焼部下の周溝を須恵器甕片で蓋をしてカマドを構築しているSI22 カマド1の袖は残存しない。

II類 燃焼部が建物壁の内側にあり、短煙道のもの。(SI23、SI25)

SI25では土師器長胴甕を逆位で据えて焚口付近の袖の芯材としている。また、燃焼部内で横に並んだ土師器長胴甕が燃焼部で出土しているが、2口で横掛けされていた状態を示すとみられる。

III類 燃焼部が建物壁の外側にあり、短煙道のもの。(SI22 カマド3、SI26)

壁を掘り込み構築されている。SI22 カマド3の壁は粘土が貼られており、焚口側に口縁部を向けた横位の土師器長胴甕を芯材としていた。左壁前端付近では逆位の土師器長胴甕片が残っており、そこでも土師器甕を芯材としていたとみられる。SI26ではカマド本体のうち半分が建物の外にある。なお、SI21、SI22 カマド2、SI29では燃焼部が建物壁の内側にあるが、煙道の長短は削平、あるいは調査区外にあるため不明である。

支脚はSI24で専用支脚が出土したほかは転用であり、SI23・26では逆位にした土師器甕体下部～底部片を支脚とする。

表1 豊穴建物跡一覧

	規模・深さ・方位			主柱	床	カマド 位置	焼け面	粘土	ロクロ ピット	建物内 土坑	外延溝
	東西(m)	南北(m)	深さ(cm)								
SI21	4.1	3.6	18	N30° E	○	貼床	北	○	—	—	2
SI22	6.4	5.2	36	N22° W	4本	南半貼床	北2南1	○	一部あり?	○	5
SI23	3.8	4.7	28	N4° W	外?	外縁貼床	東	○	部分	—	2
SI24	6.1	4.3~	24	N10° E	4本?	貼床	北	○	広範囲・塊	○	2
SI24旧	3	2.2~	10	N10° E	—	地山床	—	—	—	—	2
SI25	3.6	3.6	32	N4° E	—	一部貼床	北	—	—	—	1
SI26	3.2~	3.4	18	N4° E	—	地山床	南	—	塊	—	—
SI27	0.8~	7.2	12	N25° E	—	貼床	—	—	—	—	—
SI29	3.9	5.7	26	N7° E	外	南半貼床	東	○	—	?	5

ロクロピット

SI22 では断面漏斗状で軸径 10 cm・軸長 34 cm、SI24 では断面形台形状で軸径 6 cm・軸長 49 cm である。SI24 ではピットの近くに粘土塊がある。主柱穴と規模・構造が異なること、柱穴として位置が組み合わないことからロクロピットと判断した。これらのほかに SI29 では柱または軸木とみられる痕跡を伴うピットを検出している。構造は柱穴と同じであるが、主柱穴として組まないことからロクロピットの可能性もある。

粘土

粘土塊は SI24・SI26 で確認した。平面楕円形の塊で、厚さ 10 cm 前後である。また SI23 では建物南東隅付近、I24 では北辺付近を除いて厚さ 1 ~ 5 cm ほどの固くしまった粘土の広がりを確認している。これは貼り直された床、あるいは土器づくりに使われた粘土の残りや貯蔵された粘土の残滓が何度も踏み固められたものと考えられる。

土師器焼成遺構

堅穴建物跡と同様に丘陵頂部平坦面に集中するが、建物跡よりやや分布範囲が北まで広がっている。11 基のうち 3 基が堅穴建物跡と重複し、堅穴建物跡より新しい。

平面形は隅丸方形、楕円形、楕円形の一方が窄まつたいわゆるイチジク形がある。規模は全体の傾向をみると、イチジク形のものが大きく長軸 2.5m 前後、短軸 2 m 前後、楕円形・隅丸方形は相対的に小さく、長軸 2 m 前後、短軸 1.5m 前後であるが、これ未満のものもある。断面は平坦な床から緩やかに壁が立ち上がるが、イチジク形のものは窄まる側（前壁）は緩やかだが、その反対側（奥壁）はやや直に立ち上がる。被熱痕は、奥壁と奥壁側の床が強く焼ける反面、前壁側はあまり焼けていない。断面や平面から前後を判断できない焼成遺構でも被熱面が偏ることから、イチジク形と同様の構造と使い方があったことが分かる。

遺物は焼成遺構に伴う黒色土層からロクロ調整の土師器壊・甕片が出土している。器面が剥離した破片や小破片の出土が目立つ。

出土遺物

土師器、須恵器、平瓦・丸瓦などの瓦や陶製の錘と紡錘車などが出土している。以下では、遺物の主体を占める土師器と須恵器を概観する。

土師器はこれまで確認されたものはすべてロクロ調整である。壊、蓋、小形甕、長胴甕、甌などがある。甌は、底部が張り出す無底の甌である。相対的に壊は少量である。須恵器は、壊、高台壊、双耳壊、塊、高壊、盤、蓋、壺、鉢、中甕、大甕などがある。壊底部は、ほとんどがヘラ切り無調整で、回転糸切り無調整のものや手持ちヘラケズリを施したもののがみられる。



図4 SI21 竪穴建物跡（北から）



図5 SI24 竪穴建物跡（南から）



図6 SI24 ロクロピット（東から）



図7 SI25 竪穴建物跡（南西から）



図8 SI25 カマド（南から）



図9 SX37 土師器焼成遺構（南から）



図10 SI29 竪穴建物跡（西から）



図11 SI29 カマド下暗渠（西から）



図12 SX38・39 土師器焼成遺構（南東から）

まとめ

建物に敷設されたロクロピットや床に置かれた粘土塊は、建物内での土器づくりを端的に想定させるものである。このほかにも外延溝や焼土や炭化物、土器片を多く含む堆積土を確認した建物内土坑などいずれも作業場としての性格を示す施設や状況を確認している。また、SI29では堆積土・床から大量の須恵器を中心とした土器が出土している。須恵器は壊だけでなく多数の盤や双耳壺なども含んでいる。須恵器窯に近接した立地であることを踏まえると、竪穴建物のうち、上記の施設をもつ SI22・23・24・26・29 は、須恵器生産にかかわる作業場であった可能性がある。

彦右エ門橋窯跡では、竪穴建物が作業場としての性格が強いことと合わせて、カマドが3基ある SI22 など、頻繁な施設のつくり替えが確認できた。こうした状況とカマドや竪穴建物構造の多様性は、彦右エ門橋窯跡の建物群が作業のある時期のみ利用される、時期ごとに工人の入れ替えがあった可能性も今後の検討課題としておきたい。

重複関係は、竪穴建物より土師器焼成遺構が新しいことから、今回の調査区は須恵器生産の作業場として利用されたのち、土師器を焼成する場に変化したとみられる。

時期は整理中のため、現時点で詳細を示すことは困難だが、おもな竪穴建物跡が窯跡操業時期と並行する8世紀後葉～9世紀前葉（一部9世紀中葉を含む）、土師器焼成遺構が建物跡の時期以降の9世紀代と大きく捉えておきたい。



図 13 彦右工門橋窯跡遠景（南東から）

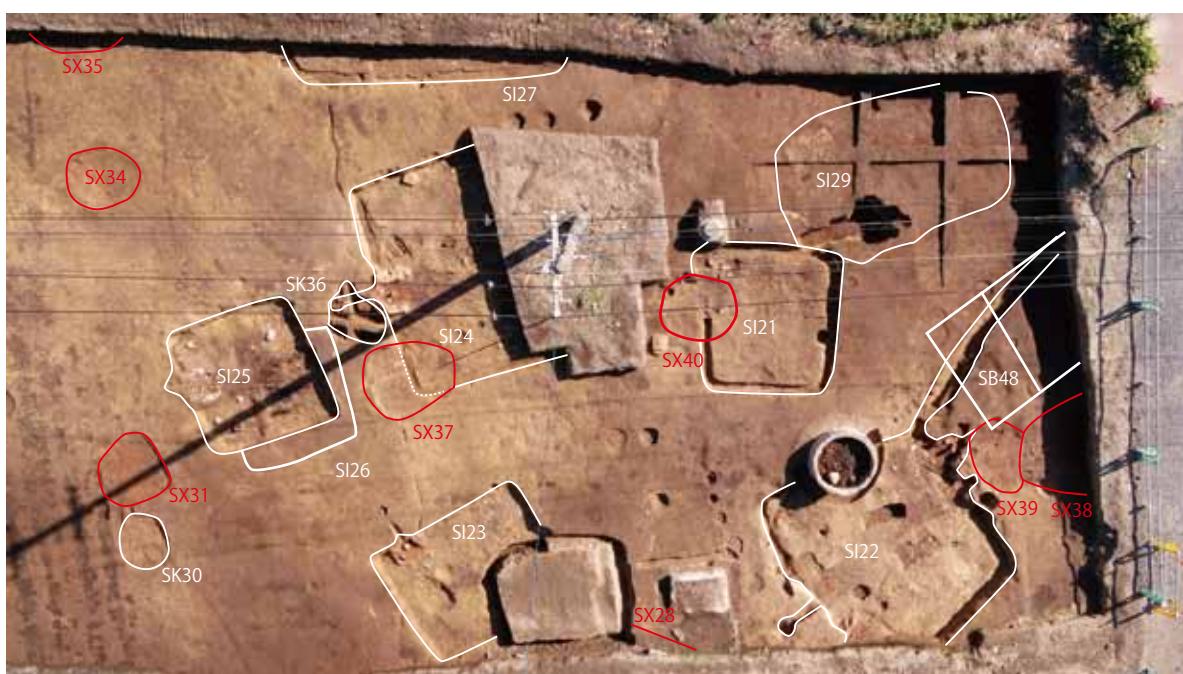


図 14 彦右工門橋窯跡俯瞰写真（下が西 右が南）